

抜刷：『印度學佛教學研究』

Offprint from *Journal of Indian and Buddhist Studies* [=JIBSt]

工藤 順之

「Absolute Locative の用法について」 『印度學佛教學研究』 38-2, 1990.3, pp. 914–912(L).

(Noriyuki Kudo, "On the usage of Absolute Locative," in: *Indogaku Bukkyōgaku Kenkyū* [= *Journal of Indian and Buddhist Studies*], 38-2, 1990.3, pp. 914–912(L)).

Absolute Locative の用法について

工 藤 順 之

0. Pāṇ[ini]は Sanskrit における名詞—動詞関係を表す為に *kāraka* という概念を用いている。六種の *kāraka* のうち、1.4.45は動詞に関してその動作の基層 (*ādhāra*) となる項を *adhikaraṇa* として規定し、この *adhikaraṇakāraka* は動作者が動作を行う位置、或いは動作が向けられる対象の位置を表し、言わば間接的に動詞と関係する。形態的には 2.3.36 によって第七格 (依格, *saptamī*) をとる。*adhikaraṇakāraka* を経由した第七格は、動作の行われる状況をいかなる立場から見るかによって種々の意味をもつことになるが、中でも特徴的な用法が 2.3.37 に規定されている。これが所謂 Abs [olute] L [ocative] と呼ばれるものである。

1.1. 先ず 2.3.36 に対する *v[ār]t[tika]* に補足追加として Abs. L. が規定されている。vt. 3 では特定の行為を行うに値する者がそれを行うという事実を伝える項に L. の使用を認め、vt. 4 は行うに値しない者が行わないという事実を、vt. 5 は行うに値する者が行わない／行うに値しない者が行うという事実を伝える項に L. 使用を認める。議論を先取りすれば、この補足は後続規則 37 の適用域に抵触しない。Kai[yaṭa] によれば、二つの *bhāva* 間に *lakṣyalakṣaṇabhāva* が存在するケースが 37 の適用域であり、逆にそれが存在しないケースが vts. 3-5 の適用域になる。ex.) *ṛddheṣu bhuñjāneṣu daridrā āsate*。ここでは食べることと坐ることの間に特定の指示関係がない。両者は偶然に起こったかもしれないから。

1.2. 2.3.37 *yasya ca bhāvena bhāvalakṣaṇam*。「或る *bhāva* (A) によって (別の) *bhāva* (B) が指示される (場合も第七格が使用される)」。

先ず、規則中の *bhāvalakṣaṇa* が欠如したケースにおける L. 使用を正当化する為に vt.1 で補足規定の必要性が言われる。ex.) *agniṣu hūyamāneṣu prasthito, huteṣv āgataḥ*。この用例では、供物を捧げることが必ずしも去る／戻ることを指示するわけではなく、二つの *bhāva* 間に固定した指示関係が見出せない。また、36 の vts. によっても L. 使用を正当化出来ないから、vt.1 の補足が要求される。

ところが続く vt. 2 では、この vt. 1 を放棄して、規則そのものを *bhāvapravṛttau yasya bhāvārambha(h)* と再定式することを提案する。この修正によって、或る *bhāva* の進行中に第二の *bhāva* が生ずるケースには、前者を表す項に L. を使用できるから、vt. 1 を要求した用例はこれで正当化されるのである。

しかし、Pat[*añjali*] はこの再定式に対して、規則の wording が変更される点で不満を洩らす。そこで Pat. は規則を保持する為に *lakṣaṇa* を拡大解釈する。*sakṛd api yan nimittatvāya kalpate tad api lakṣaṇam bhavati* 「一旦或るものが(他の)証因たるものとして機能するなら、それも *lakṣaṇa* である」。即ち、一度でも二つの *bhāva* が共存すれば、次からは一方が他方の *lakṣaṇa* となり、初めてその共存を知る者にとってもその時点では *lakṣaṇa* と見做される。

以上のように、Pat. は Pāṇ. 規則を守り、用例を正当化する(かに見える)。

2.1. Pāṇ. 規則中では、*lakṣaṇa* は 1) 指標・指示、2) 特徴、3) (〜に対する方向を) 指示すること、の意味で用いられる。37では1)の意味に相当するが、一方が他方の指標であるには両者間に何らかの確定的関係を想定する必要がある。例えば、Kai. が挙げる *agnidhūma*, *Nāgeśa* の挙げる *udayati savitari tamo naṣṭam* のような、一種の因果関係がそれにあたる。

Pat. が vts. 1-2を否定し、*lakṣaṇa* を拡大解釈したことは、二つの *bhāva* 間にあらかじめ固定した関係を想定する必要がなくなり、偶然的な共存のケースでもそこに *lakṣaṇa* を意識すれば、L. 使用を許すことになる。そして、vts. 3-5 ad 36も実質的には不要になろう。*lakṣaṇa* の存在有無は話者の意識の問題になってしまうからである。

2.2. vts. を含めた注釈書類(Kaśikāvṛtti, Kai.)では、*bhāva* が *kriyā* と同義に解されているか、そのまま置換されている。しかし、Pāṇ. 規則中において *bhāva=kriyā* と用いられる例があるのだろうか。

bhāva は単独或いは複合形で27例用いられているが、その意味は①動作名詞に表される「〜という状態」、②何かの結果としての「状態」、③抽象的性質、④自動詞から作られる非人称受動形によって伝えられる意味、に大別される。特に①は定形動詞の意味としての *kriyā* と対比して使われている。無論、*bhāva* の意味が規則中で常に一定であるとは言えないにしても、或る規則では *bhāva=hriyā*、別の規則では *bhāva↔kriyā* という相反した役割を Pāṇ. が与えていたとは考えられない。仮に *bhāva=kriyā* という解釈をとるとすれば、37を **yasya ca kriyāyā kriyālakṣaṇam* と定式化することで用語法上の混乱は回避できたは

ずである。

Pāṇ. が bhāva によって規則を立て、註釈家がそれを kriyā と解釈した、それぞれの意図については俄かには判別し難いが、Abs. L. の構造に一つの手掛りがあるのではないかと思われる。

3. Abs. L. の一般的構造は〔名詞+分詞 (pres.p. or past p.)〕である。印欧語においては名詞句が normal な構文であるから、分詞が省略/名詞 (形容詞) に代置される型も認められる。Abs. L. はそれ自体が完全に独立した構文であり、分詞形はその中に意味上の主語を持ち、主文の主語に対して文法的に何ら依存しない。また、構文中の主語 (相当語) は主文中にいかなる形でも再出しない。同一動作者の二つの bhāva は、Abs. L. ではなく、絶対分詞 Absolutives (3. 4. 21) で表現する。

構文と主文との関係において、bhāva A を表す分詞形と bhāva B を表す項の時制は必ずしも一致しない。(上述の用例参照。) また、bhāva A ; B の時間的前後関係も Abs. L. の構造からは決定出来ない。ex.) brāhmaṇeṣu taratsu vṛṣalā āsate ; vṛṣaleṣv āsneṣu brāhmaṇas taranti. これらのことは構文中に用いられる分詞形が動詞の時制体系に完全には調和していないこと、そして L. 形に表現されているのは bhāva A 中の時間的な特異点ではなく、A という一連の状況下において B が生じたこと、つまり中心的内容 B を指示する状況を表すことを示している。(Abs. L. における \sqrt{as} , pres. p. sat- の類出/補填は構文による時間の特定ではなく、「何らかの状態がそこに在ること」を表す為であろう。)

動作は、時間的順序に配列される諸部分から成る過程と表すか、部分に分割出来ない全体と表すかの何れかである。前者は定形動詞に表される特定動作 (kriyā) を意味し、後者は動作名詞に表される或る動作によって生じた継続的状态 (bhāva) を意味する。

この「動作」表現間の差違をいかに解消するかが後代の課題となっているが、この問題は Nirukta に見られるような、動詞の表す意味についての様々な議論とも関連している。37における規則解釈の相違もその中に位置付けられる。但し、Abs. L. 規定に kriyā を導くには、諸部分から成る一連の動作に対して全体性が重ね合せられ、動作の継続性が強く意識されていたにちがいない。

〔尚、意味分類における各項目の該当規則及び注については、紙数の都合で省略。〕

〈キーワード〉 Pāṇini, kāraka, Absolute Locative, Mahābhāṣya

(仏教大学大学院)